

は機能生化学に、生物薬品製造学は細胞工学にそれぞれ名称変更される。

自由科目については情報科学がコンピュータ入門に、体育実技がスポーツにそれぞれ名称変更される。

単位数は新大設置基準に準拠し決定される。講義・演習科目については半期科目は一・五単位、通年科目は三単位、外国語科目は二単位、実習は全部で一五単位、卒業論文は七単位、実技は三〇時間で一単位とされる。卒業に必要な単位数は一四四単位以上となるが、過渡期に当たる現在の在校生については新二年生は一五七単位、新三年生は一五九単位、そして新四年生は一五三単位とそれぞれ異なつた単位数となる。

また第二次カリキュラム改訂は外国語科目、専門コース科目(学科別専門科目)および選択・専門科目を中心に現在検討中である。

今回の連絡会議ではつきりしたことは、また来年度のカリキュラムは「原案の原案」という段階でしかないといふことである。そのため終了すつきりしない会議となつた。

今回、カリキュラム改訂に踏みきつた背景として以下のものが挙げられる。

一、週休二日制という社会の流れに従つたということ

二、昨年の七月に文部省令の「大設置基準」が改正されて、各大学は独自のカリキュラムを組めるようになったということ

三、今年六月の医療法の改正によつて、薬剤師の責任が重くなったということ

四、薬剤師の質を向上させるために、国試の出題基準が見直されるということ

特に注目したいのは「一」と「二」である。つまり今回の改訂で「週五日制」と「独自のカリキュラム」を同時にやつてしまおうということらしい。授業(特に実習)は当然密になることが予想される。そして「三」「四」を見てみると薬剤師としての能力はもとより、その重い責任を果たせるだけの精神面、人格面もしっかりと薬剤師が求められていくように思われる。これがカリキュラムに反映されている部分は、主に一年生の実習がなくなる時間に薬学に関する様々な科目が選択できるよつたことといふ点だろう。

いふにせよ今回の改訂の善し悪しも国家試験の結果をみれば明らかになるだろう。

「時代の趨勢(すうせい)」

今回の学内連絡会議において何度も聞かれた言葉である。このふたつの言葉こそが今回の連絡会議の全てであつたように思う。

「趨勢」とは「物事の進む方向(広辞苑より)」を意味する。今回のカリキュラム改訂の理由として「時代の趨勢」という言葉が盛んに使われた。これは言い替へれば「時代の流れに代遅れにならないように」ということにならう。

つまりこの学校における授業週五日制、カリキュラム改訂は学生のためではなく、「時代」に取り残されたいために行つたのである。つまり「時代の流れ」は、学校側にとっては、はつきり言つて学生の利益を二の次なのではないか。

そう考えるとつじつまが合う。学校側は「この改訂は学生の利益のために行つた」と前置きしたが、とてもしうは思えないのだ。学生のためのカリキュラム

# 時代

改訂であれば学生にとつて不利な条件にならざるはすもなく、「不利にならざる」という検討する「不利」という言葉はでてこない。学生に不利にならないような努力を要するものが学生の目的のものと言えらうか。

学校側はまた、こうも言つただけで「有利になるなんて言つては、有利になるなんて言つてはハッキリした。学校側は学生よりも時代に遅れないことを優先的に考えている。我々学生は「時代」に負けたのか。

「時代」って一体何なんだろう。「時代の流れ」は一体誰がつくるんだらう。我々は流れていくしかないのだらうか。いや、それはちがう。学校において「時代」とはそこに学ぶ学生の「意識」であり、その時代は「流れ」で与えるのもやにはり学生なのだ。今回、学校側は大きな間違いを犯した。時代の流れは文部省がつくるものではない。本日は試験とレポートに追われる詰込み教育の中で形式的な週休二日なんかじゃない。(浦野慎也)



発行所 東京薬科大学 新聞会  
責任者 二川祐政

# カリキュラム 変更の効果

先日の学内連絡会議の結果を報告する。議題はカリキュラム改訂についてであつた。カリキュラム改訂は第一次と第二次に分け、第一次は平成五年度新学期より全学生を対象にする。第二次は平成六年度新学期より実施される予定である。第一次改訂カリキュラムは次のものである。

まず、授業の週五日制である。これは社会の流れに合わせたもので、本学も土曜日は授業を行わないことになる。そのため現在土曜日に置かれていた科目は全て月曜日から金曜日に移行される。

次は実習についてである。実習は一年次には行わず、主に二・三年次で実施され、四年次は薬理学のみとなる。実習は週三日とし、四日目は実習の試験・演習・自習等を行うことになる。この三日プラス一日をユニットとし、前後期それぞれ十二ユニットが設けられる。また同一実習科目は同一年次で終了することになる。以上のことは、ゆとりのある、考える実習を目指すというものである。実習を行わない一年次には専門科目を増やしたり、また専門科目と有機的関連性のある新

しい科目を設け、学年の早い時期から薬学への勉強意識を高めていくように配慮されている。

次に授業科目の改訂点を挙げる。新設または名称変更科目および廃止科目については下の表を参照されたい。

来年度からは一年次に微生物学、薬用植物学が置かれ、現在設置されている解剖学、分析化学Iと合わせて必修・専門科目が計四科目となる。二年次の薬用植物学は薬用資

## 新設科目

- 情報科学論(必修)
- 地球環境概論(選択)
- 社会と薬学(〃)
- 医療制度論(〃)
- 美術史(〃)
- 数学I・数学II(必修)
- 応用統計(選択)
- 生命科学技術史(必修)
- 保健体育(必修)
- 心理学(選択)
- 経済学I(〃)
- 経済学II(〃)
- 文学(〃)
- 法学I・II(〃)
- 哲学(〃)

## 廃止科目

- 倫理学
- 教育学
- 社会学
- 数学
- 応用統計学(必修)
- 薬学入門
- 健康心理学(選択)
- 医療心理学
- 現代経済論
- 国際関係論
- 日本文学
- 外国文学
- 法学(憲法)
- 哲学(生命倫理を含む)

源植物学とされる。三年次については生薬学が通年科目となり、選択科目の生薬・天然物化学は廃止され、免疫学が新設される。また、四年次については調剤学が調剤・処方学となり、薬局方総論と薬理学IIが全員必修科目とされる。薬学部の必修科目である薬理学IIが四年生全員必修の専門科目に移行することに伴い、新たに薬学部に薬物治療学が設置される。生物薬品学